

Takashi Hirano :

An Index to the *Bodhicaryā-*
vatāraṇajīkā, Chapter IX

片野道雄

初秋を飾る素晴らしい業績がこのほど公になった。編者は大谷大学佛教学科を卒業、更に京都大学の選科で梵語を学習され、大谷大学に於いて暫く梵語文法を担当されたと聞く。その有能な梵語の理解力によって、月称造中論積の解説を進めつつ、同時に入菩提行論解説の必要性を感じられた。時あたかも、第二次世界大戦終了後間もない頃で、山口益先生の御指導の許にブラジニャーカラマティ (Prājjakaramatī) の入菩提行論細疏 (*Bodhicaryāvatāra-panjīkā*) 第九章般若品の輪読会が開催せられていて、編者もそれに列席しておられた。それが機縁となって、自坊に帰られてから、多事多端のなかでも、十有余年、中観佛教を中心とした研鑽が継続され、その細疏第九章の解説の所産として遂に意義ある索引を完成された。

この索引は L. de la Vallée Poussin 校訂梵本 (*Bibliotheca Indica, Calcutta 1901~1914*) と、影印北京版西藏大藏經 (No. 5273) とを底本としており、第九章般若品の、梵蔵、蔵梵索引の二編からなったものである。本書には、梵蔵対照の語彙や語

句がごとごとく網羅され、それら語彙の出所も逐一指示されており、また引用されている経論も両索引の終りに附記されている。網羅せられた語彙の表わし方にも、梵蔵共に利用する立場に立って配慮せられた苦心の跡が窺われる。また、本書は梵語語彙の出所を Pousin 本によって示されているが、しかし最近出版された Vaidya 本 (一九〇年 Darbhanga の *Mithila Institute* から *Buddhist Sanskrit Texts No. 12* ヴォリューム P. L. Vaidya が刊行したものである) にも Pousin 本の頁数が附記されているので、Vaidya 本を参見する場合にも一応不自由はない。本論に対するこの種の索引は他に Friedrich Weller のものがあるが、これはその偈文のみを扱っており、細疏に対するものは他にない。

ところでインド佛教思想を研究していく上に、チベット訳資料しか残っていないものが数多くあるが、それらチベット訳佛典の解説に当って、チベット語の辞典が不完全な現状であることより、この種の蔵梵索引は非常に貴重な労作であり、研究者にとってまことにありがたい。従来は、翻訳名義大集や、本書作成の模範とされた E. Obermiller の *Nyāyabindu* 及び *Nyāyabinduṭīkā* の梵蔵、蔵梵索引が有名で広く利用されていたが、最近では、京都大学の長尾雅人教授による大乘莊嚴經論、及び中辺分別論世親積の梵蔵、蔵梵、漢梵索引があり、昨年には故鈴木大拙先生の楞伽經梵漢蔵索引が復刊された。また、インドで出版された Lokesh Chandra 編 *Gatāpitaka* 蔵梵索引があつて、これは利用価値がかなり大きい。他にも二、三ある

がチベット訳佛典の解説がなされるに当って、現段階では本書の貢献するところもとより偉大である。編者には月称造中論釈の索引の編纂もやがて完成せられると聞く。

因みに、編者は入菩提行論細疏の第九章を何故選定されたか、若輩が述べるに及ばないであろうが少し注意したい。入菩提行論は、金倉円照著「悟りへの道」(サーラ叢書)の解題に、或は山口益著「般若思想史」(法蔵館)等に述べられているように、それは、ジャンティデーバ (Gantideva・寂天・七世紀後半) の深奥な宗教的経験を、端麗な詩に歌い出された偈文であって、月称の入中論とともにプラサンギカ派中観説 (Madhyamika-prāsaṅgika) の学説体系に関する重要な書である。然もこれの諸註積本中、唯一の梵蔵の整うたプラジュニヤーカーマティの細疏は、その第九章のために全体のほぼ半分を費していることなど、特にこの第九章は重要視される。また P. L. Vaidya 博士は、その細疏の著述された事情について、プラジュニヤーカーマティは始めに第九章を註釈し、その後、第一

章以下の註釈を附加したものであろう、と推察されており、殊に Pousin 博士は、その細疏の梵本校訂出版に当って、先ず第九章を別個に刊行せられたのであった。従って月称造中論釈の解説を進めておられた編者にあっても、その第九章の重要なことを痛感せられ、当初にも一言述べたように輪説会を機縁として、その解説を、中論釈の解説と並行して進められるに至ったのでないかと思われる。しかも、チベット訳佛典解説に当っての現段階への編者の深い洞察と、学界の強い要望と相俟って、解説の都度作成されていた索引を公にされる運びとなったのであろう。

ともかく本書は、梵蔵の文献研究者、或はインド佛教思想の研究を志している者、殊にチベット訳佛典解説に携わっている者にとって無視できない尊い労作である。

(Suzuki Research Foundation, Tokyo 1966 220×159 450 pp. 4,000 yen)